

小學作法一班

佐久間舜一郎
進藤貞範

編輯
四

佐々木 邦 編輯

小學作法（一班）

岡山縣師範學校盛版

小學作法一班卷之四

第一章

衣服冠履著脱の作法

衣服を華美を好むべからず
父母兄弟の著せ給ふもののみ。漆
色模様など。自ら好惡を云ふべ
からず

衣服ハ。常正しく著成し。帯を正

しく結ぶを善とし。片前の下りた
ると帯の垂れ下りたるなどい。見
苦しきものふて。且無作法なり
幼稚の時より。衣服い必じ自ら著
習ひて。父母兄姉の手を煩はすべ
りらず

重ね著のときならば。襦袢より下
著上著と。丁寧小襟袖を合せて著

くべー
父母兄姉の著
せ給ふ時わ。静
りふして成し
給ふまゝ不隨
ふべし。氣隨を
云ひ。又。騒々敷
手足を動かすなどまべりらば

衣服を母不著けて貰ふ圖



一 間不入り袴を着る 圖



袴ハ。前を持ち
て左の足より
踏み入れ。次ハ
右の足を入れ。
紐付ひもつきを帯の上
小當て。前紐ひもを
後腰しろこしの帯下小
當て。結むすび留め。後

小腰當を帯の結び手の上小當て。
紐をバ前より取りて結ぶべし。
衣服を着くるふ。必ず一間不入
りて着くべし。
人の坐したる前小て。裸体を見
まなざしハ。特更小無作法なり
足袋。ツホン。パッチ。などハ尚更人
の前小て着くふららぢ。

然れども間敷なき家小て止を得
べ。人前小て著くる事ある時ハ先
づ其坐の人小挨拶をなし置き。成
るべく片隅に據りて著くべきな
り
洋服を著くる小わ。肌著。ツボン下。
よりツホン。チヨツキ。上著と順次
小著くべし

是れ亦成るべく人の手を借らざ
る様小。自ら著け習ふべきなり
手拭と帯或ハ袴紐など小。垂れ流
して挿むべりらず
手拭を疊みて内懐うちぶこころ小収め置くべ
し
襟飾の外。首巻を纏ひながら。尊長
の前小出づべりらば

雨羽織小類をる上着ハ。凡て着け
ながら。貴人ハ接對せべりらば
然れども時と處ハ因りて。脱ぐこ
と能ハざる時ハ。貴人ハ向ひて。
其趣き挨拶せべし
女子ハ七八歳より。自己の衣服ハ
必ぢ自ら疊み収むることを習ひ
置くべし

男子ハても八九歳の頃より。自己
の羽織袴を成るべく自ら疊み覺
ゆる事を。心掛くべきなり
冠帽を。必ず正しく著くべし。帽の
正しくらざるを。容も見苦しく。且
行儀の不正を知らるべきなり
靴及び履草履の類を。必ぢ正しく
脱ぎ置くべし

如何不急ぎの時不ても。跨りたる
ま、脱ぎ飛して置く畚りらば
又。人の靴草履の上不踏うけて脱
ぐべりらず

我家不ても。常不靴履など入るべ
き棚不取り収めて。仮初不も脱ぎ
捨てたるま、置くべりらば

他の家不至り一時を脱ぐべき場

所を見定めて。足並正しく脱ぎお
くべー

他の家を出るとき。我靴履の特更
不取り揃へてある時ハ。其場の人
は挨拶して穿くべー

凡て。穿物てきものを猥り不人の物を穿く
べりらば

第二章

障子襖開閉の作法

障子襖を出入るふは常の如く跪
き。左の手をつき。
右の手ふて可き
程ふ押し開き。そ
り入りて後を閉
つべし。必じ立ち
て入るべりらば。

襖を開く圖



又。立ちて閉づべりらば
少し小ても立付ミツマシを開け置くべり
らば。且貴人の坐したる方を見遣
り。及び脇目せべりらず
障子襖を開くんとする時。其前
人あらば。徐々ふ閉ぢて。他の處よ
り開け入るべし
已ふ入りて。後あとより来たる人あら

バ。開けたるまゝ、不立ち去るべし。
入る来る人を見ながら不閉ぢ切
ることハ失禮なり
人の坐敷居間など不入る時不ハ。
先づ聲作りして後障子襖のち。を開く
べし
凡て。開閉々。毎不徐々不せべし。必
ず荒々敷音あらく敷音立つべからず

第三章

尊長師友不對する作法

貴人の前不て々。謹慎を旨とし。坐
しゝる時不々。両手を膝の上不置
き。体を正しくなし居るべし
腕を組合せて坐立したるを横柄
なり
貴人の物語りし給ふ時々。謹みて

聴くべし

我より貴人の問ひ給をぬ事を。喋々として多く語るべからず。同輩の中ふても。人の物語り未だ了らざるを。旁より猥りお物言ふを失礼なり。凡て人と物語り為すは。差し近づきて言ふべからず。口氣の人お

及ぶは失礼なり

貴人の前ふて。襪くつを取ら不敬なり。

必だ次の間お立ち出で、取べし。

若し立ち難き

場合お下坐

お向ひ。少し低

く取て。拭ひ置

くべし

次の間におてを履取る図



鞵を取おき。初めお少しく低く短く取とり。次また少しく高く。其次また又また初はつの如ごとく短く。三切さん取とり。平生へいより斯ごとくの如ごとく取とり置おくべきなり。凡たゞて。人の中なか取とり高たか鞵を取とり失あれはなり。貴人きの前まへ取とり。吐あけの伸の唾つ吐きく事ことなり。ど皆みな失あれはなり。

盛暑せい小こ方かたり。貴人きの前まへ取とり。汗あせの出いたるときは。次またの間ま立たち出いて。手て拭ぬぐ。取とり。下した坐まり。向むかひて拭ぬぐ。汗あせの額かぶ及および頸のど筋すぢなど小こ流ながれたる。ま、坐まりたるときは失あれはなり。貴人きの前まへ取とり。扇あふ子こ團だん扇せんなど違ちがふ。

貴人の前にお扇子を遣ふ圖



ことゝ失礼なれども暑さ堪えがたき場合お左の手をつき前
 小少一差一屈み。我鼻の邊りおて徐々と遣ふまで
 なり。直坐のまゝ腕など巻りて。氣
 隨小遣ふことゝ大なる失禮なり

扇子を何の席おても四時とも小
 持つを礼と以。坐お就きたる時ハ。
 抜きて右の膝脇お置き。歸るとき
 小復前腰お挿むべし
 凶事の席おてを挿みくるまゝ、抜
 りざるを法と以
 人の書画及び詩歌などを見る小
 を。先づ戴きて後抜き視るべし

人の書画を親も



自作の文章及び書画など。人より所望を受けとる時々。一應辭退すべし。其上尚望まるる時々。其拙きを挨拶して

差し出さべし。必だ自慢箇間敷。人の請えざるものを取り出して披露すべし。

第四章

人を饗應する時の作法

父兄が人を招きて。饗應なり給ふ時々。己が力のなり得べき事々。務めて手助けを為し。門内庭前の

掃除など。氣を配りて清潔お為べきなま

客の未もど来きらざる以前いぜんお父兄ちちあにの指圖さしずを受けて。座敷ざしきおをあ煙草盆たばこぼんなど。来客きやくの多少たうしやうお従したがひて。豫あめ其設しやうけをなし置くべし

火鉢煙草盆など。凡たゞて客きやくお出できべき器物きぶつを必かならずに塵ちりを掃はひて。清きらり

小拭こふきひ置くべし

垢かつきたる不ふ潔けつなるものを差さし出できる。大おほなる失礼しつれい也なり。廁せうの洒掃しやうばう。手水てすい鉢はちの水換みづかへな

響應器具の塵を拂ふ圖



日本書紀卷之六十五 上三

ど。必^{かならず}づ等閑^{なげ}小^こ立^たべ^りら^らむ

床の飾り附^つけ心を^{こころ}用^{もち}ふ^るの^の圖^ず



冬^{ふゆ}々^々。客室^{きやくしつ}を温^ぬめ。夏^{なつ}ハ。庭前^{ていぜん}小^こ灌水^{かんすい}遣^や水^{みづ}など
の設^{しやう}けをなす
こと饗^{かう}礼^{らい}第一^{だいいち}
の用意^{ようい}なり
掛物^{かぶつ}の掛^かけ方^{かた}。

花の生^なけ様^{さま}。床の飾^{かざり}り付^つけなど。已^いが未^{いま}ど及^{およ}びバ^ばざる事^{こと}をぞ。能^{あた}々^々心を
用^{もち}ひて。父兄^{ふけい}の為^{ため}に給^{たま}ふを視^し覺^{かく}え
置^おくべきなり
客^{きやく}の来^きるを見^みる時^{とき}ハ。中門^{ちゆうもん}或^{ある}は戸^こ
口^{くち}まで出^でて迎^{むか}へて。丁寧^{ていねい}小^こ敬^{けい}礼^{らい}一^{いつ}。
始^{はじめ}ての人^{ひと}ならぞ。已^い先^{まづ}小^こ立^たちて案^{あん}
内^{うち}一^{いつ}。既^い小^こ相^あ知^ちる客^{きやく}ならぞ。其^{その}後^{のち}小^こ

隨ひ。客椽ノ上り給へる時。已ハ椽
の際ノ立ち。坐敷ノ入り給へると
き。椽ノ上りて勝手の方へ往くべ
客既ノ坐ノ着き給え。先づ茶を
出さべし。
客の著席漸次ノ相揃ふを見合せ
て。徐りノ料理を出さべし。早から

遅りらば。時宜の見合せ第一な
り

第五章

饗應の時通ひの作法

通ひを勤むるノ進退行歩の間。
最も意を用ひて。踈躁の事を為さ
べりらば
席上ノ物を覆し。或ハ物を踏飛

をまなどむ。客不對して甚き失
礼なり

然れど物を捧げて歩行さるる。
腰を据ゑ腹を張りて。膝頭の屈ま
ぬやうに身を固め。肱を少しえ
る心持ちにまてべし。餘り張り過
ぐればいりつふして。宜しうらむ。
譬は腋の下に雞卵一つを挿して。

碎きもせむ。又落しもせぬと云ふ
計り不為さるべきなり。
客の多人數なるときは。先づ通ひ
の内にて手分けをなし。誰々の右
組。誰々の左組。誰々の向組と。各々
主任を定め。左を勤むる者。右も
向ふも省み。獨我受持のみを專
ら不勤むべし。斯の如くあるとき

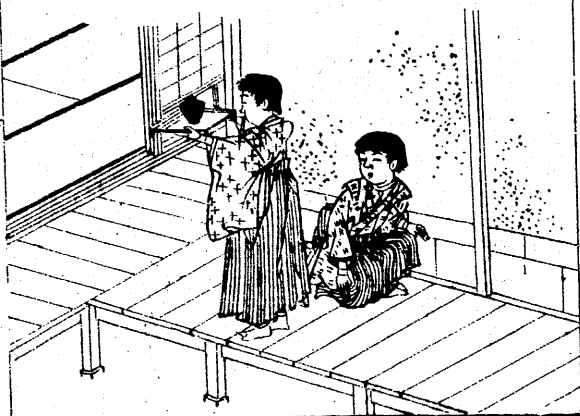
通ひの三手作りの図



ハ。引違ひ。取違
へ。間抜けなど
の誤りなく。席
上の混雑も有
るべからば。之
を古礼おて。通
ひの三手作り
といふなり

通ひの行違ふ時ハ。手明きの方よ
り旁へ避け。手をつきてつば蹴つひ。物持
ちたる方を通
て後。立ち行くべ
場隘き座敷など
おても殊更心得
置くべきなり

通ひの行者の違ひの図



八景下巻一王長四十七

小學作法一班卷之四

小學作法一班卷之四 畢

全 明治十七年一月十一日出版權免許

編輯人

出版

定價 金六錢五厘

岡山縣平民 佐久間舜一郎

岡山縣西川九十九番屋敷寄留

岡山縣士族 進藤貞範

岡山區門田屋敷三十三番屋敷

岡山縣師範學校藏版